

ご面倒をおかけしたことを記して、感謝の意を表したい。（元東京大学理学部人類学教室助手）

引用文献

- (1) 石橋次雄・木村方一・後藤秀彦（1974）『十勝太若月——第二次発掘調査——』
- (2) Netolitzky, F. (1912) Hiese und Cyperus aus dem prähistorischen Ägypten. Bein. Bot. Cent. XXIX, 1-11.
- (3) Netolitzky, F. (194) Hiese aus antiken Funden. Sitz. Mathe. Nat. Acad. Wiss. CXXIII, 725-759.
- (4) Netolitzky, F. (1927) Arbeitsmethoden zur mikroskopische Untersuchung verkohlter Körper. Microkosmos 2 Q, 178-183.
- (5) 近藤万太郎・笠原安夫（1934）「粟・黍・稷及び近縁植物の穎の灰像の比較研究」『農学研究』23巻、199-242.
- (6) Watanabe, N. (1970) A Spodographic analysis of millet from prehistoric Japan. 357-379.
- (7) 渡辺直経（1974）「灰像による穀物遺残の検出法（下）」『考古学研究』21巻、55-62
- (8) Watanabe, N. (1968) Spodographic Evidence of rice from prehistoric Japan. 217-235.
- (9) 松谷暁子（1968）「カマド内焼土にみられる灰像」『八王子中田遺跡資料篇Ⅲ』八王子市中田遺跡調査会、102-104
- (10) 松谷暁子（1977）「千葉市東寺山石神遺跡第2号住居址出土灰化物および炭化物の灰像について」『東寺山石神遺跡』第Ⅲ部、千葉市文化財センター、527-528.

チャシの橋状遺構について

後藤秀彦

I. はじめに

北海道におけるチャシ跡の調査研究は近年とみに盛んになり、特に道東域では北海道教育委員会や釧路川流域史研究会、十勝川流域史研究会などによる一連の分布調査と地形測量によって、その数は飛躍的に増加し、その数は全道で最終的に700基（宇田川、1980）とも1,000基（藤本、1980a）になるとも言われている。

また、地形測量等の進展に伴ない、従来言われてきた「海や河川や湖沼を眼下に臨む高所」という立地觀から、更に複雑な立地や構造をもったチャシの存在も明らかになってきた。

更に、チャシのもつ機能についても、ややもすると「砦」という一般的和訳に翻弄されるかのように、戦闘施設あるいは防御のための施設という觀念を長い間拭いきることができなかった。しかし、漁労権紛争と入会地の問題からチャシを論じた本堂寿一（本堂、1979）やチャシの成立は惣将制の成立に対応するという海保嶺夫の論（海保、1974）が発表され、更に宇田川洋（1980）が本堂の論を批判する中で「交通路」あるいは地域毎に異なったかかわり——コタン・交易ルート・入会地——をチャシ成立の背景としてとらえるなど、

従来とは趣きを異にした論が提出されてきている。

しかし、以上の論文の主題はいずれもチャシ成立の社会経済的背景を論じたものであって、機能を論じたものではない。

この機能については、従来の諸説に加えて松田猛の「資源監視機能としての見張台」（松田、1973）や藤本英夫による「鮭漁に関する祭場・監視場」（藤本、1976）などの説が新たに提出されてきている。

チャシの構造——特に立地と壕形態に規定される——も新発見のチャシが続出する中で様々な様相をもつものがあることが知られるようになった。それらは従来から知られていたタイプのものに加え、例えば陸別町トライ第Ⅲチャシのように壕が入り組んで構築されるもの（石橋・後藤、1977）や根室市チャルコロモイチャシ（伊藤、1938）、標津町タブ山チャシ（畠、1980）のように数基のチャシが組み合わさったようなもの、更に枝幸町幌別北チャシ（大場ほか、1972）、弟子屈町サンペコタンチャシ（澤・松田編、1977）（澤編、1978）のように壕が途中で切れ橋状となっているものなどが知られてきている。

筆者は、この小文で最後尾にあげた壕の一部が

途中で切斷され橋状となっているチャシをとりあげ現在までに知れるところを記してみたいと考えている。

なお、この小文を書くにあたり石橋次雄・澤四郎・藤本 強・宇田川洋の各氏に多大なご教示を賜わった。ここに、銘記して感謝申しあげたい。

2. 橋状遺構のあるチャシの例

チャシに壕は付きものであるといわれている。事実、鶴居村在住の故八重九郎翁は壕のことをカムイルコッ (Kamui-ru-kot) と言い、これの無いものはチャシコッではないとさえ言っている (藤本、1980a)。この発言を裏付けるかのように現在までに発見されているチャシ跡の大部分が壕を備えたものであり、壕の有無が逆にチャシ跡と認められるメルクマールの主要要素となっている。このようにチャシ跡の確認は、壕の存在の有無によって規定されることが多いが、その中に僅かではあるがチャシ内部と外部の交通を保障するかの如く橋状遺構のあるチャシが存在する。

以下、管見の範囲でこうした遺構をもつチャシ跡を例示したい。

①枝幸町幌別川尻北チャシ (Fig. 1-1)

小独立丘陵上に 2 条の壕が築かれている。南側の壕は幅 3.5 m、深さ 1.7 m で底部は U 字形ないし V 字形を呈している。壕の延長は推定 12 m である。一方、北側の壕は幅 1.8 m ~ 2.5 m、深さ 1 m 前後で、丘頂部では壕が切れブリッジ様の遺構をもっている。このチャシ跡に伴なう遺物として太刀・小札・鉄製鉢?・宋錢・アイヌ玉などが出土している (大場ほか、1972)。

②根室市キナトイシ 1 号チャシ

根室半島北岸キナトイシ湾を眼下に臨む台地上にあり、壕は湾に向って開口するコの字形のもの 3 基が連結して構築されている。壕の幅は 1.5 m、深さは 1 m 前後でその一端はブリッジとなって残されている (藤本、1980b)。

③根室市チャルコロモイチャシ (Fig. 1-2)

根室半島の西部、オホーツク海を眼下に臨む小岬上にある。根室半島に所在するものの中では最大規模で三プロックから構成され、その中央部では 3 重に壕を築き、その外側の 2 本は途中で切れブリッジ状となっている。また、壕の両側に土壘状の盛土がある (高橋、1980a)。

④根室市ホロモシリ 1 号チャシ

オホーツク海に面した海蝕崖上にコの字形の壕が築かれている。壕の北端は海に向って開口しているが、北西端は崖の 3 m 程前で途切れブリッジ状となっている (高橋、1980b)。

⑤根室市ホロモシリ第 2 号チャシ

前述のチャシの南西 17 m のところに所在する。1 号と同様に北端は海に向って開口しているが、北西端は崖の 4 m 程前で途切れている。また、崖から 7 m のところにもブリッジが設けられている (高橋、1980b)。

⑥標茶町伊茶仁第 2 チャシ (Fig. 1-3)

伊茶仁川沿岸の高位段丘上にあり、壕は不明瞭であるが、ほぼ半円状に築かれているようである。西側の壕は擦文化期の竪穴住居跡の手前で途切れブリッジ状に土手が残されている (畠田、1980)。

⑦弟子屈町サンペコタンチャシ (Fig. 1-4)

釧路川西岸のやや突出した河岸段丘の先端附近をとりまくように 1 条の壕が築かれている。図示したように壕北端は沢に向って開口せず、またその壕も 1.5 ほど掘削されて立上り、2 つのブリッジを残して弧状に構築されている。本チャシ跡は、この小文で述べるチャシ跡中唯一全面発掘調査の行なわれたものである。チャシに伴なう遺物として刀・刀子・鑿・輪・煙管・釘・鉄鍋・古銭 (祥符元宝・皇宋通宝・永樂通宝)・鉄鎌・砥石・ガラス玉などが報告されている (澤・松田編、1977) (澤編、1978)。

⑧浜中町鯨浜チャシ (Fig. 1-5)

太平洋を眼下に臨む海岸段丘上にある。壕はコの字状に小湾に向って開口しているが、北側の隅では途切れブリッジを形成している。このブリッジが意図的なものなのか、自然埋没なのかは不明であるという (福士、1980)。

⑨豊頃町礼文内神社チャシ (Fig. 1-7)

十勝川左岸の河岸段丘上、眼下に礼文内川を臨む箇所にある。チャシは、この河岸段丘端に孤状の内壕と方形の外壕が組合わさって形成されている。この内壕の中央附近と外壕の南側に夫々ブリッジが設けられている (後藤、1980a)。

⑩芽室町丸山チャシ (Fig. 1-6)

十勝川の一支部美生川右岸に沿ってほぼ南北に細長く延びる小独立丘の頂上部に隅丸長方形の周

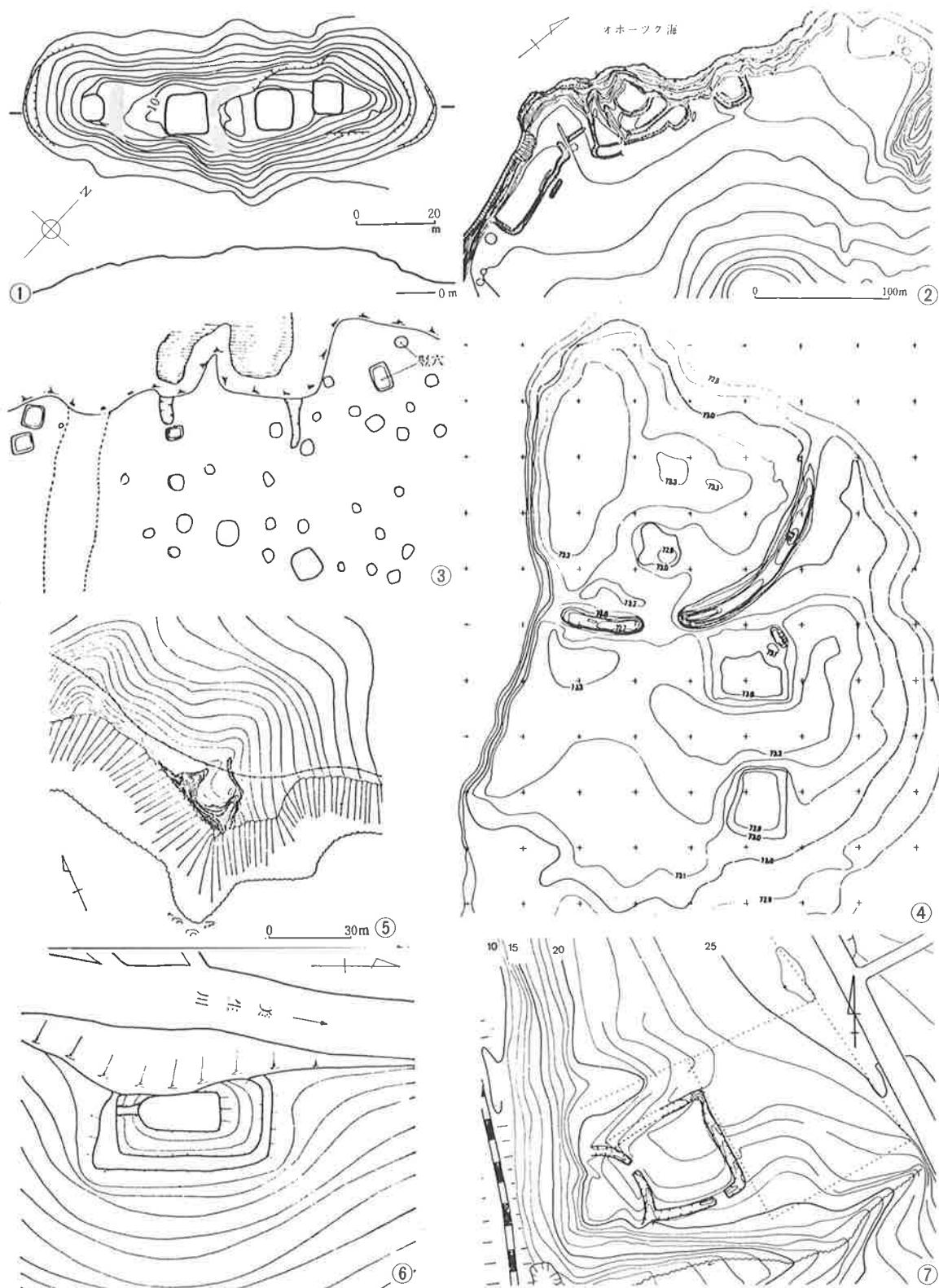


Fig. 1 橋状遺構のあるチャシ (1:幌別川尻北チャシ 2:チャルコロモイチャシ 3:伊茶仁第2チャシ
4:サンペコタンチャシ 5:鯨浜チャシ 6:丸山チャシ 7:礼文内神社チャシ)

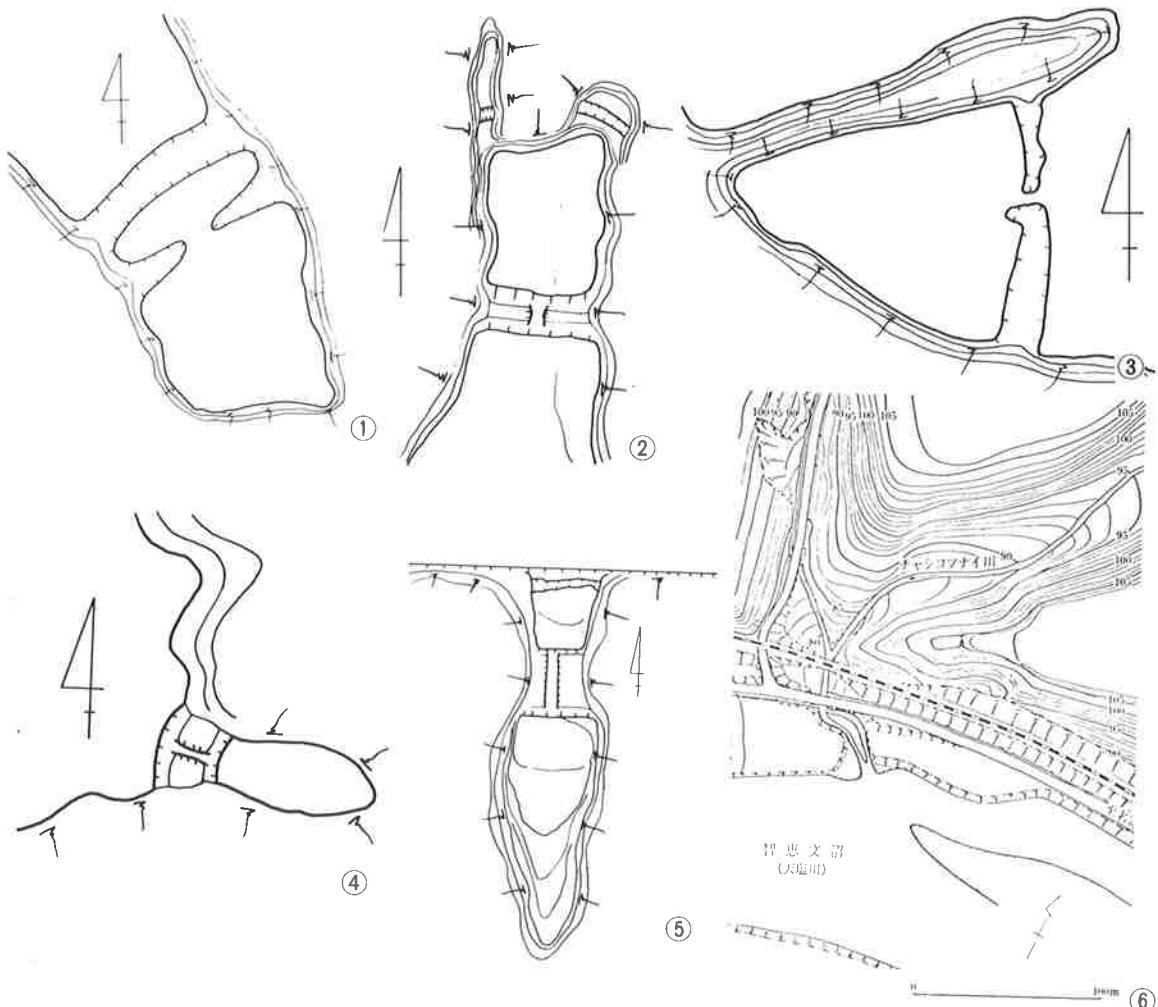


Fig. 2 橋状構造のあるチャシ (1: トブシチャシ 2: 稲志別チャシ 3: 相生Cチャシ 4: 相生Dチャシ
5: 下士幌チャシ 6: 知恵文チャシ)

壕が築かれているがいわゆる「お供山形」で、頂上の内郭は7m×15mの平坦面となっている。このチャシ南端部の壕内に狭いブリッジが設けられており、この箇所だけ壕は浅くなっている(後藤、1980b)。

⑪足寄町トブシチャシ (Fig. 2-1)

十勝川の最大支流利別川の右岸河岸段丘上にある。壕は2条あり、外壕は直線的に段丘尖端を切斷しているが、内壕はその中央附近で途切れブリッジとなっている。

⑫幕別町稻志別チャシ (Fig. 2-2)

眼下に旧途別川を臨む河岸段丘上に、突出した小支丘を切断するように1条の壕が掘削されてい

る。壕の幅は約7mあり、その中央附近の壕内に幅1.5mのブリッジが設けられている。

⑬音更町相生Cチャシ (Fig. 2-3)

十勝川左岸の河岸段丘上に、切れ込んだ沢を利用して作出されている。この突出した舌状部の基部附近に1条の壕が掘られている。この壕の中央附近は途切れてい幅の狭いブリッジが形成されている(石橋ほか、1980)。

⑭音更町相生Dチャシ (Fig. 2-4)

前述の相生Cチャシに並び、細長く突出した舌状段丘の基部に幅7mの壕が築かれている。この壕内の中央附近に幅1m、高さ0.3mのブリッジが設けられている(石橋ほか、1980)。

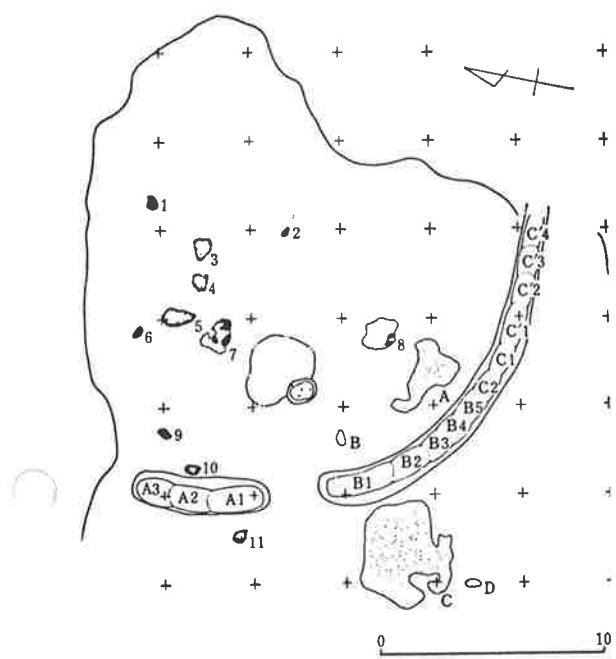


Fig. 3 サンベコタンチャシの掘進工程図

⑯音更町下土幌チャシ (Fig. 2-5)

十勝川左岸の河岸段丘上、池田町との境界附近にある。舌状の段丘の基部附近に2条の壕（外壕は道路工事により過半が破壊されている）が築かれ、そのうち内壕内に幅1m、長さ6mのブリッジが設けられている（石橋ほか、1980）。

⑰名寄市智恵文チャシ (Fig. 2-6)

天塩川とその支流チャシコッナイ川に挟まれた南西に細長く伸びる半島状の丘陵の先端附近にある。壕は、その中央附近で途切れブリッジを形成している。ブリッジの幅は1.5mである（鈴木、1979）。

⑯弟子屈町ヌパシュナイ第2チャシ (宇田川、1980)

⑯津別町チャシパアンピラチャシ (宇田川、1980)

⑯根室市トーサムポロL1地区チャシ (宇田川、1980)

⑯釧路町リータッコブチャシ (宇田川、1980)

以上、北海道内のチャシ中「橋状遺構」のあるチャシの例を管見の範囲で20基あげた。⑯から⑯については、具体的な報文が見当らずチャシ名のみをあげるにとどまつたが、宇田川洋は網走市呼

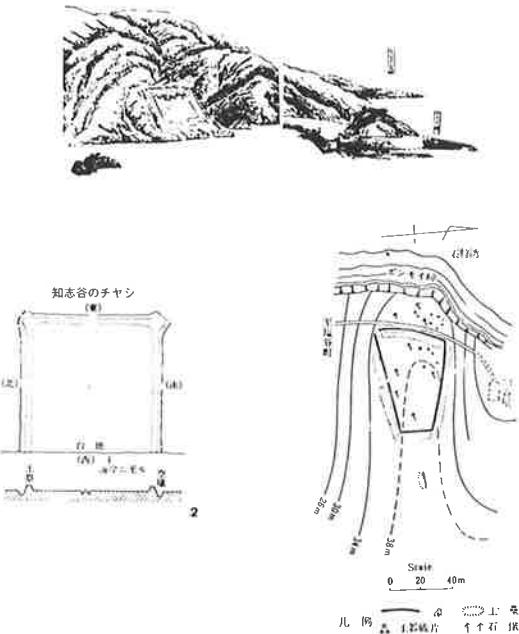


Fig. 4 樺太における橋状遺構をもったチャシと北海道の類例 (1: ギイのチャシ 2: 知志谷のチャシ 3: ポンモイチャシ)

人チャシもこの仲間に入れている（宇田川、1980）。しかし、河野広道の報文（河野、1958）によれば図中に橋状遺構は見当らないので除外した。

さて、これらの橋状遺構がチャシ構築時から意識的に作出されたものか、あるいはチャシ廃棄後に何らかの理由によって壕の一部が埋覆され橋状となったのかは外見の観察だけでは判断に迷うものがある。事実、前記した20例のチャシにしても鯨浜チャシなどはその判断を保留している（福士、1980）。

しかし、中には明らかに橋を意識して作出されたものもあり、チャシの全面発掘調査——殊に壕部の全面発掘——によりその意識の度合いが明確になってきている。

次項では、これらのデータを明確にした弟子屈町サンベコタンチャシの例を見てみようと思う。

3. サンベコタンチャシの橋状遺構

釧路市桂恋フシココタンチャシの全面発掘調査以来チャシの壕の掘削工程に注意が向けられるようになってきた。また、その後の釧路町遠矢第2チャシ、弟子屈町サンベコタンチャシにおいても掘作工程の解明に眼が向けられ、北側に3工程、

No.	チャシ名
1	枝幸町幌別川尻北チャシ
2	根室市キナトイシ1号チャシ
3	根室市チャルコロモイチャシ
4	根室市ホロモシリ1号チャシ
5	根室市ホロモシリ2号チャシ
6	標津町伊茶仁第2チャシ
7	弟子屈町サンペコタンチャシ
8	浜中町鯨浜チャシ
9	豊頃町礼文内神社チャシ
10	芽室町丸山チャシ
11	足寄町トブシチャシ
12	轟別町稚志別チャシ
13	音更町相生Cチャシ
14	音更町相生Dチャシ
15	音更町下土幌チャシ
16	名寄市留恵文チャシ
17	弟子屈町スパシュナイ第2チャシ
18	津別町チャシバアンビラチャシ
19	根室市トーサムボロシ1地区チャシ
20	釧路町リータッコブチチャシ

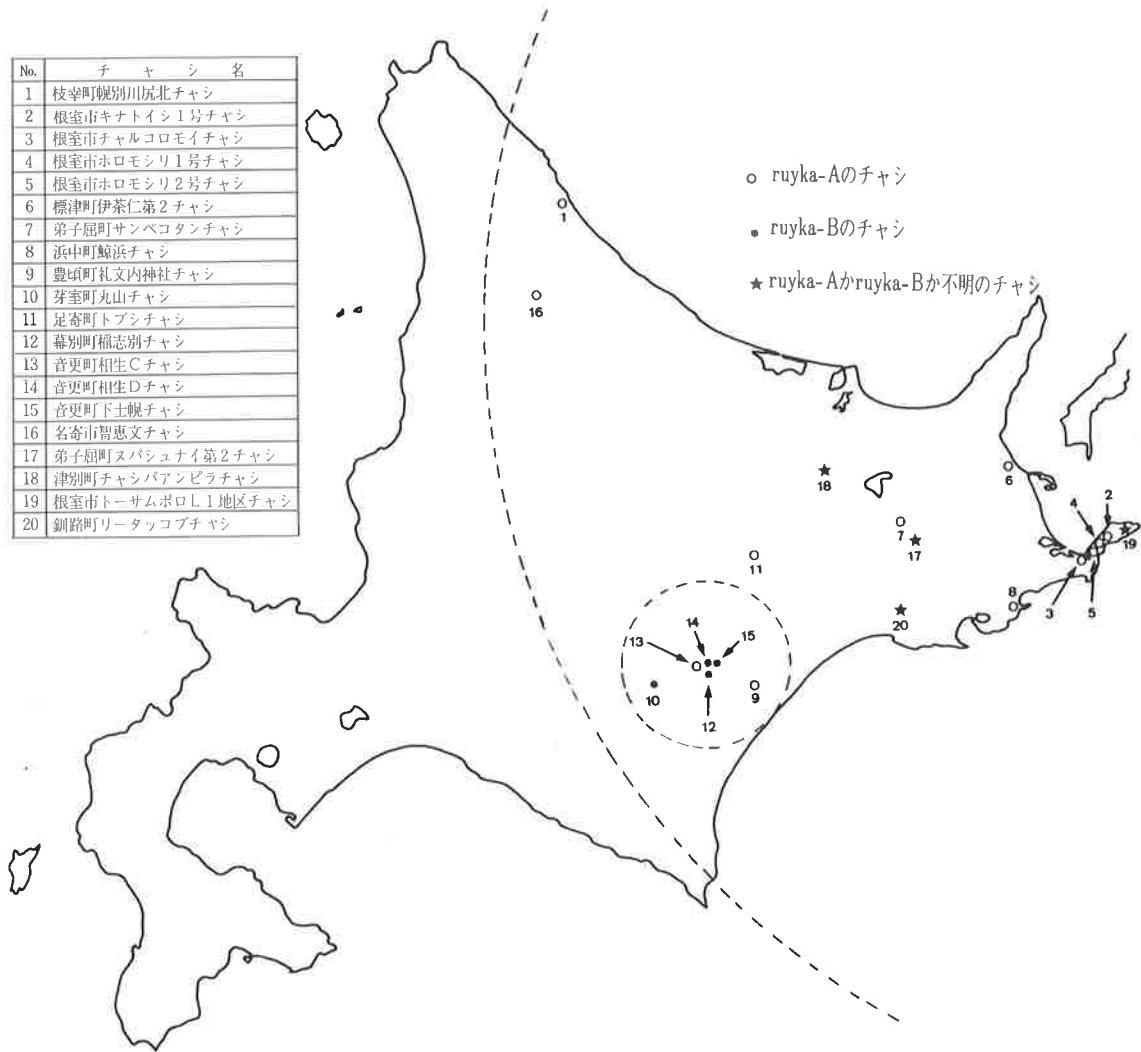


Fig. 5 北海道における橋状遺構をもったチャシの分布

東側に11工程が推定されている（澤・松田編、1977）。

この掘削工程の解明は、壕掘削の労働力、作業進行方向、排土量、1人区の作業量などチャシ構築にかかる基礎データとなるが、壕そのものをどの部位から掘り始めるかという点も橋状遺構の解明にとっては重要である。

この点について西 幸隆は、サンペコタンチャシの2つの壕はいずれも陸橋の両端から掘り始め、当初から意図的に橋部を残す予定であったと指摘している（西、1980）。

このことは、当該チャシが未完成ではない限り意図的・計画的に橋を作出した結果にはかならぬ。そして、北海道内に所在するチャシの中には明らかに橋をもったチャシが構築され、使用され、

廃棄されてきたことを如実に物語るものである。

4. 樺太における橋状遺構をもったチャシ

2. において北海道内に所在する橋状遺構をもったチャシの例を見てきたが、樺太のチャシの中にも同様の機能を具備したものがある。

①シラヌシのゲイのチャシ (Fig. 4-1)

1809（文化6）年から1810（文化7）年にかけて、樺太に越冬し蝦夷の救済に尽力した幕吏松田伝十郎はシラヌシのゲイのチャシを記録している。それによれば、「シラヌシよる去る事凡一里程東海岸に字ゲイと称する所あり。其処に砦の旧跡あり。夷言にチャシと称す。凡三百間四方にして、三面に堤を築き、前の一方は堤なし。三方とも堤の下ごとくから堀にて、今に其あと連綿とし

であり。所の老夷に尋るに、何のとき又何もの造るにや年月は勿論皆主どもしるものなし。其製鳴夷の作る處にあらざるゆへに図を顯す」とある。また、残された図には、ほぼ四角形に築かれた土壘と海に面した側に出入口と思われる土壘の無い部分が認められ注目される（松田、1882）。

②知志谷のチャシ (Fig. 4-2)

ゲイのチャシの類似例として旧留多加郡能登呂村大字知志谷にある「知志谷のチャシ」がある。同様に海に面し、丘岬の突端に方形状の壕と同形の土壘を備えている。この壕と土壘は海方向を除く三方に築かれているが、その夫々の中央附近に壕と土壘の切断が認められる（木村、1933）。

なお、前2チャシに類似の遺構として新岡武彦は小樽市塩谷のポンモイチャシなどをあげている（新岡、1965）が、個々のチャシの詳細は不明である(Fig. 4-3)。

5. 橋状遺構の機能と構造

北海道のチャシ20例および樺太のチャシ2例を通して観察し、またサンベコタンチャシの壕掘削工程のあり方をみてきたが、この橋状遺構について宇田川洋は河野広道（1958）のいうルイカ（ruyka）（橋）であり、チャシアパ（chasi-apa）（チャシの入口）に代る施設であろうと言っている（宇田川、1980）。筆者も、この考え方を支持するところであるが、壕に取付けられた土製のruykaを吟味すると大きく2つの型があるようである。それは、壕の一部を完全に断ち切って作出されるruykaと壕の内部に低く（その箇所だけ壕は浅くなる）作出されるruykaのことである。

前者を今ここで仮りにruyka-A、後者をruyka-Bと呼ぶと、前者の例には幌別川尻北チャシ、キナトイシ1号チャシ、チャルコロモイチャシ、ホロモシリ1号チャシ、ホロモシリ2号チャシ、伊茶仁第2チャシ、サンベコタンチャシ、鯨浜チャシ、礼文内神社チャシ、トブシチャシ、相生Cチャシなどがあり、後者の例として丸山チャシ、稻志別チャシ、相生Dチャシ、下士幌チャシなどがある。

こうして見るとruyka構造をもつチャシの存在は、現在までのところ道東北にのみ限定され、宗谷岬と襟裳岬を結んだ線よりも東側に全て所在している。このことは勿論、分布調査の精粗および

調査者の視点の差異などに左右されるが、道内でも比較的チャシの多い日高管内からの報告が無いことに留意しておきたい(Fig. 5)。

また、ruyka-Bをみると報告のある4基は全て十勝地域に限定されており、更にこれらは十勝川中流域部に集中している。しかし、この仲間については、壕中にruykaの認められるものであり、様々な自然的要因によって肉眼では観察しにくいという条件があるので、今後他地域からも検出され類例が増加するものと思われる。

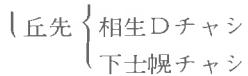
さて、ruyka構造のあるチャシを立地、チャシ形態によって分類すると次のようになる。

○立地による分類



○形態による分類





以上2つの分類によっては、ruyka-AおよびBの顕著な差は出てこない。ただ、ruyka-Bの全ては臨川性であり、丘頂式・丘先式のものが多いということだけである。チャシの編年について宇田川洋は丘頂式→丘先式→面崖式の変遷を考えている（宇田川、1980）が、この試案を基に考えてみるとruyka-Bの方がruyka-Aよりも古い傾向を示すようである。しかし、ruykaの存在はチャシの立地や基本形態にかかわりなく組み合わさっているとも考えられ、木製のruykaのような動産と異なり恒久的營造的である土製のruyka、chasi-apa構造の存在はチャシ後背地との交通を永続的・日常的に認めうる社会的・経済的背景と大きくかかわるものであるといえよう。

また、サンペコタンチャシのように当初から計画的にruykaを作出しているチャシのほかに、チャシの改築・増築に伴なってruykaを作出したものもあると思われるが、現在の段階では言及しない。このようなチャシにはruyka-AおよびBの両者のパターンが想定されるが、ruyka-Bについては、前述のように十勝地域のみでの検出であります。種々の検討は今後に残された問題である。

6. おわりに

チャシの壕に架かるruykaについて、便宣的にAおよびBの両タイプに分類し、具体的にチャシ名をあげて比定してきた。恒久的なruykaの発生・使用・廃棄および分布については、今後の調査研究に待つところが多いが、現在の段階では少なくとも道東北、殊に十勝・釧路・根室地域に数多く発見されていることは否めない事実である。チャシ本来の機能と成立の背景の解明なくして、最終的にこの問題を語ることはできないであろう。今後のデータの集積と分析を待ちたい。

（浦幌町郷土博物館学芸員）

引　用　文　献

石橋次雄・後藤秀彦（1977）「北海道陸別町で発見した4つのチャシ跡」『浦幌町郷土博物館報告』10
——・——・菅 訓章・佐藤訓敏（1980）

- 「十勝川中流域の遺跡群」『北海道考古学』16
伊藤初太郎（1938）「根室半島に存在せるチャシ」『考古学雑誌』28-7
宇田川洋（1980）『アイヌ考古学』
大場利夫・新岡武彦・大井晴男・菊池俊彦（1972）『北海道枝幸郡枝幸町川尻チャシ調査概報』
海保嶺夫（1974）「チャシ（砦）の文献史的考察」『日本北方史の論理』
木村信六（1933）「樺太に於けるチャシに就きて」『樺太新聞』（藤本英夫・名嘉正八郎編『日本城郭大系』1 1980所収）
河野広道（1958）「先史時代」『網走市史』上
後藤秀彦（1980a）「礼文内神社チャシ」『日本城郭大系』1
——（1980b）「丸山チャシ」『日本城郭大系』1
澤 四郎・松田 猛編（1977）『弟子屈町矢沢遺跡調査報告——第1次調査——』
——編（1978）『弟子屈町矢沢遺跡調査報告——第2次調査——』
楫田光明（1980）「伊茶仁第2チャシ」『日本城郭大系』1
鈴木邦輝（1977）『道北のチャシ』
高橋稀一（1980a）「チャルコロモイチャシ」『日本城郭大系』1
——（1980b）「ホロモシリチャシ」『日本城郭大系』1
新岡武彦（1965）「日本北辺の土城に就いて」『北海道考古学』1
西 幸隆（1980）「チャシ構築時における壕の掘進工程について」『日本城郭大系』1
畠 宏明（1980）「タブ山チャシ」『日本城郭大系』1
福士廣志（1980）「鯨浜チャシ」『日本城郭大系』1
藤本英夫（1976）「チャシについて（覚書）」『北海道考古学』12
——（1980a）「概説」『日本城郭大系』1
——（1980b）「キナトイシ1号チャシ」『日本城郭大系』1
本堂寿一（1978）「北海道におけるチャシ遺跡の諸問題——その構築時期をめぐって——」

『歴史手帖』 6—11

松田 猛 (1973) 「釧路地方におけるチャシコツ」
『釧路川流域の遺跡』

松田伝十郎 (1822) 『北夷談』(高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』4 1969所収)

浦幌町における蝶類の出現期

——特にタテハチョウ科についてⅡ——

▼イチモンジチョウ

Ladoga camilla japonica Ménétrier



採集地：帶 富

採集年月日：1972.7.9.

採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

本州では年2～3回発生するが、北海道では年1化となる。浦幌での発生は、7月上旬から8月中旬に記録されている。

▼コミスジ

Neptis sappho intermedia W. B. Pryer



採集地：帶 富

採集年月日：1973.5.27.

採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

浦幌における発生は6月から7月上旬が普通で、年1化である。Table 1 の8月中旬とあるのは、1976年8月15日の記録で、年によっては部分的な2化の発生も考えられる。『北海道の昆虫』(田辺、1979)によると、道内では年2回の発生とされている。

▼ミスジ

Neptis philyra excellens Butler

1971.8.16.

採集地：福 山

採集年月日：1971.8.16.

採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵



浦幌における採集例は、1965年8月11日(阿部)

円子紳一

宏氏)、1971年8月16日(筆者)の2頭しかない。いずれも汚損した個体であることから、実際の発生はもっと早いものと思われる。

▼フタスジ

Neptis rivularis aino Shirôzu



採集地：千 歳

採集年月日：1971.6.26.

採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵

6月中旬から8月にかけて普通に見られる。年1回の発生で、全国的な発生期と殆ど同じである。

▼アカマダラ

Araschnia levana obscura Fenton

(春型)

採集地：新 町

採集年月日：1971.5.19.

採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵



(夏型)

採集地：万 年

採集年月日：1971.8.7.

採集者：円子 紳一
浦幌町郷土博物館所蔵



北海道特産種。春型と夏型で班文が非常に異なり、別種かと疑うほどである。

浦幌における春型の発生は4月下旬から5月下旬。夏型は6月から7月にかけてで、道内の一般的な発生より1ヶ月ほど早い傾向にある。

また、1973年には9月16日という遅い記録があるが、第3化の発生か?